

と言うので、じいじをお店に連れていくことがありました。ある時、うなぎ屋に連れていく計画をしていたら、父の都合が悪くなりました。母は一人で車いすの介助が行えるのか心配していました、じいじが楽しみにしていたので、母と兄と私で連れていくことになりました。

そのお店に行くのは二回目、予約もしていました。車いすに乗せたじいじをお店に入れる時、私はドアを開けようとしていました。すると前にいるお客さんがドアを開け道をあけてくれました。また、二つ目の入り口は少し段差があって母がうまく車いすを押せずにいると近くにいたお客さん二人が車いすの左右を持って手伝ってくれました。

母はじいじの手をおしぼりでふき、お水を飲ませると、手伝ってくれた人の席に行って、お礼を言っていました。久しぶりの外出にじいじはとても満足そうで、おいしそうにうなぎを食べていました。また食べにきたいと言っていました。今回私はうまく手伝えなかったけれど次に行った時は、もっとスムーズに手伝いたいと思っています。けれど、新型コロナウイルスが流行し始め、じいじとの面会や外出が出来なくなりました。最後はスマートフォンで話すこ

とが出来ましたが、たどたどしい話し方で、うなぎを食べに行った時のような元気さはもうありませんでした。

コロナがなければ、もっとじいじに会いにいたり、じいじの行きたいお店に連れていかれたと思います。当時、じいじの身体はだんだん固くなっていました。けれどきつと固くなったら、出かけられなくなるからと思い、連れて行っただけです。だから、車いすが入れるように入り口のドアをさっと開けてくれたり、車いすが進めるように手伝ってくれた人の親切は、相手にとってみたら、小さな親切かもしれないけれど、私にとっては大きな出来事でした。そして、私の中で大切なじいじの思い出として残っています。そのことを思い出すと、泣けてきそうだけれど、逆に心がぽかぽかとした気持ちにもなります。

私はまだ力がないので、車いすをうまく動かすことはできません。けれど、ドアを開けたり、道を空けたり、ちょっとしたことは出来ると思います。そうした私の行動がいろいろな人の役に立ち、相手がうれしい気持ちになってくれたらいいなと思います。

## 入選 中学生の部

### 「この一言」

富士市立大淵中学校 二年

上倉 莉瑠

「どうぞ」

振り返ると高校生ぐらいの男の人が、お年寄りの方に電車の席を譲ろうとしていました。私は、こんな風に声を掛けられる紳士的な人がいるんだと、感心して、その後の様子を見ていました。しかし残念なことにそのお年寄りの方は、

「いいよ、いいよ。」

と遠慮して座りませんでした。何度か男の人は席に座ることを勧めていましたが、結局、お年寄りの方には座ってもらえませんでした。私はこれを見て少し切なくなりました。きっと、自分が親切でやった事でも、相手に遠慮させてしまう事があるのかなと思いました。自分の親切と相手の感じている事が同じとは



入選

限らないとも思いました。でも、席を譲る行為は良い事なので、お手本にしようと思いました。そんな場面が来たら勇気をもって真似をしてみようと思いました。それと、これから席を譲られることがあったら、素直に座ろうと思いました。

私は、習い事の関係で、中学一年生の時から電車に乗る機会が増えました。夕方に乗ることが多いので、電車の中は少し混んでいます。会社や学校帰りの人達が多く乗ってきます。

ある日、私は、いつものように電車に乗っていました。そんなに混んでいなかったのですが、席に座ることができました。一駅過ぎると、サラリーマンの人が乗ってきました。その方は結構疲れている様子だったので、席を譲ろうとしました。でもこの前の電車で見えた男の人を思い出しました。あの人のように断られてしまうかもしれないと心配になって、声をかけることができませんでした。そして、そのまま席を立つただけになってしまいました。私が席を立った後にその方は座ってくれました。その時、座ってくれて良かったと思いました。

したが、私は、「どうぞ。」

たったこの一言がかけられませんでした。一言をかけることに、こんなにも勇気があるものなんだと思いました。私は勇気を持てませんでした。前に見た男の人は、すごい勇気を持ち主なんだと思いました。

これからも電車に乗る機会が増えると思います。おんなじ場面に遭遇したら、勇気をもって声をかけようと思いました。また、電車の中で席を譲る事だけに限らず、困っている人がいたら、ためらわずに行動に移せるような人になりたいと思いました。小さな親切が普通にできるような大人になれるように頑張っていきたいです。

### 当たり前の親切

浜松市立三方原中学校 三年

伊藤 ひな

「いいからこれ持っていきな。」

そう言われ、渡されたのはビニール傘だった。

私は断ることができず受け取ってしまった。

これはつい先日、私の身に実際起こった出来事だ。その日は、天気が崩れる予報でそれなのに、私は生憎傘を持っていなかった。部活が終わり友達と下校しようと外に出ると、その時にはもうパラパラと雨が降ってきていた。だんだん雨も強まり、急いで帰ろうと友達と別れて一人で歩いていると、反対側の車線に一台の車が停まった。男の人が車から出て来てトランクの中の何かを探していた。私とその車の横を通り過ぎようとすると、

「これ持っていきな。」

私は、自分が声を掛けられた事に気が付き、振り返ると、男の人がビニール傘をこちらに差し出していた。私は、

「え、でも…。」

と、断ろうとしたが、

「いいからこれ早く持っていきな。」

と、何度も何度も言われ、私はお礼を言いあげた。ビニール傘をもらい、家に帰った。私は、雨の日に傘をあげる人など現実ではそんなにいないと思っていた。だから、とても良い経験をしたと嬉しく思っていた。しかし、その事を母

に話すと、母はとても心配した。まったく知らない人に物をもらって大丈夫なのかと…。母の言葉を聞くと、私もだんだん不安になってきた。それでも私は、その男の人がいい人だと思い続けることができた。それは、男の人の気持ちを考えて思ったことがあったからだ。会ったこともない、知り合いでもない私に話しかけるのはとても勇気のいることだと気付いたからだ。もしも私がその人の立場だったとしたら、知っている人ならまだしも、見ず知らずの人にこんなふうにできるだろうか…。きっとできないと思う。そして、これは、私に限ったことではないだろう。きっと多くの人がその男の人と同じ行動は取れないのではないだろうか。世界中の人々からは、日本人はとても親切だという高い評価を受けている。しかし、それは世界の人々が日本に対して持つ強いイメージでしかないのではないだろうか。私のように、一步を踏み出せない人もたくさんいる。だからこそ、多くの人々が行動できるようになればいいと思う。そうやっていくためには、日々の生活で当たり前に行っていることが私は大切だと思う。そして、私自身も、誰に対してもやさしさを持

てるように、日常生活での姿勢を見直していきたい。

### 私なりの思いやり

静岡市立蒲原中学校 三年

伊藤 光羽

「思いやり」の形というものは、人それぞれ違う形を持っているのだと思います。

私が特にそれを感じたのは、つい最近の団体連でのことです。私たちの最後の大会、ずっと見守ってきてくれたコーチが仕事の都合で来られないとのことでした。アップの前には別のコーチに集合をかけられ、行ってみると来られなかったコーチが三年生一人一人にお手紙を書いてくださったとのことでした。私は手紙を受け取り、近くの段差にこしかけて読みはじめました。その瞬間、私の目からたくさん涙がこぼれ落ちてきました。それを見た二人のチームメイトは私の背中をさすってなくさめてくれ、他のチームメイトたちは、「絶対負けないよ！頑張ろうー！」

と、気合いを入れてくれました。

形は違えど、どちらも私の気持ちを考えてやってくれたことに変わりはありません。人が人のための思い、相手の気持ちを尊重してとった行動ならばそれはその人なりの思いやりの形なのだと私は思います。

だからと言って自分が思う思いやりを相手に強要するものではありません。例えば、大人数で会話をしているときに、一人だけ話に入っていない友達がいるとします。それに気づいて、「自分だったら会話に入りたいから、話を振ってあげよう。」と、話しかけたとしましょう。もちろん、うれしいと感じる人も多くいるでしょう。それは、自分が相手の気持ちを尊重してとった行動で、その思いが相手にとってもうれしいことだった、つまり自分の思いやりの形が相手にあてはまったということです。

しかし中には、「自分から話をするのが苦手だから、みんなの話をきいている方が良かった。」と感じる人もいるかもしれません。それは、自分の思いやりの形がうまく相手にあてはまらなかったといえるのではないのでしょうか。



入選

そんなときに、

「私がせっかく話を振ってあげたのに、どうしてあの子は全然話に入ってこないの!？」

なんて思ってしまったら、それは自分が思う思いやりを相手にも強要してしまっていることになると思います。

人間は、感情を持って生活する生き物ですから、合う人、合わない人、自分と考えが似ている人、全くちがう人、さまざまでしょう。大切なのは、相手の気持ちを尊重し、相手の立場にたって行動することです。例えばそれが相手に上手く伝わらなかったとしても、自分が優しい気持ちをもってそれを行動に移すことができたことは、大きな一歩ですし、自信を持つべき行動です。

私はこれから、自分なりの思いやりの形を持ち、それを実行に移したいと思います。また自分が相手に何かをしてもらったときは、感謝の気持ちを忘れずに生活します。

## 「私が見習った小さな親切」

磐田市立福田中学校 一年

今井 和花

「ここすわっていいですよ。」

と小さな女の子が言った。電車の中で立っていたおばあさんにやさしく声をかけていた。おばあさんは笑顔で、

「ありがとうね。」

と女の子に言った。女の子のお母さんはとても誇らしげな顔をしていた。私はすぐすてきな女の子だと思った。私はおばあさんが立っているのを目に入っていた。でも声をかける勇気が出ずにそのまま椅子に座っていた。私よりも勇気がありやさしい心をもった女の子を見ていると自分もしっかりしないと、という気持ちになった。

それから電車に乗る機会があったら周りを見て高齢者の方がいないか確認するようになった。それは自分の中でも成長したと思えた。今まで何も気を遣っていなかった自分が、変わったんだと思うとうれしかった。けど、高齢者の方が立っているのを見ても、あと一歩のところで勇

気が出ず声をかけることができないままだった。このことを友達に伝えると、

「勇気とかじゃなくて、自分が本心に席をゆずりたいと思ってるなら声はかけれるんじゃないの。」とかるい口調で言った。その言葉を聞いてはったとした。自分が今までどれだけでもじしていたかと思うとはずかしくなった。自分がちよつと変わっただけでうれしいと思つてばかみだいたいと思った。女の子には席をゆずつてあげたい、笑顔になつて欲しいという気持ちがあつたのかなと思つた。私はただ自分がゆずつてあげるという考えがあるだけ良いと思つていて、女の子のような気持ちがなかつたのかもしれない。

その後一度だけ電車に乗る機会があつた。自分は席に座れてラッキーと思ひながらスマホをいじっていた。次の駅でつえをついてるおばあさんが乗つてきた。自分は立ち上がり、

「席どうぞ。」

と声をかけていた。自分でもびつくりした。おばあさんはにつこり笑つて、

「ありがとう。」

と言つてくれた。こんなにうれしい気持ちになつたのはとてもひさしぶりだった。

あの時出会った女の子のおかげで自分は成長できた。「ありがとう」という言葉がどれだけすてきか気付くことができた。

小さな親切でも大きな幸せをもらうことができる。自分はこれからも小さな親切をつみかさねていきたい。そして大きな幸せをたくさんもらいたい。

## 人と人との関わり

静岡県立浜松西高等学校 中部部 二年

宇佐美 夢

どのくらい多くの人がテレビの前で、東京オリンピックを観戦したのだろうか。本来は観客を入れて盛大に行われる予定だったが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって叶わないこととなってしまった。コロナウィルスは、自由な生活と私たちをひき離していっただけでなく、いつしか人と人との距離まで離してしまったように感じる。しかし、この状況の中でも、私の心を温かくしたある出来事があった。

オリンピックに出場する全ての選手達は、金メダルを志して、期待と不安を胸に当日を迎えるのだろう。そのために厳しい練習や不安にも耐え、日々努力している。だからこそ選手達は自分の努力の成果を発揮できることを一番望んでいるはずだ。そのため私は、選手達は自分の勝利のことだけを考えていると思っていたが、それは少し間違っていた。

男子八〇〇メートルの準決勝にボツワナのロンドンオリンピック銀メダリスト、ニジェール・アモス選手が出場した。メダル候補として、注目されていたが、他の選手の転倒に巻き込まれるというアクシデントが起きてしまったのである。五年間の歳月をかけてきた選手にとって、とても悔しく、あまりにも悲しい結果であったに違いないはず。しかしアモス選手は相手の選手を責めることなく、諦めずゴールへ共に向かっていったのである。スポーツはどうしても勝ち負けを基本とするため、相手が敵のようになってしまふ。けれども、国やライバルという存在関係なく、二人が手を握り合い、並走するという行動は世界中に大きな優しさを与え、コロナウィルスによっ

てできた人と人との壁を壊していくかのようだった。私はこの美しい光景を見て、自分のことだけでなく相手を思いやれる心こそ人間が絶対に忘れてはならないことだと思った。結果のことだけを考えるのではなく、状況を受け止める姿勢に感動した。

これらのことはオリンピックに限る話ではない。全ての人に当てはまる話だ。私もアモス選手のように自分の不運をいつまでも引きずって後悔するのではなく、相手の気持ちを考えた前向きな言動ができるようになりたい。また、人と人とのつながりが薄くなってきた今だからこそ、一つ一つの出会いを大切にしていくなべきだと思う。自分の小さな思いやりのある言動が相手の心を救うかもしれない。さらに、どんどん広がっていけば、周りの環境が温かく変わっていくかもしれない。小さな親切を積み重ねて、よりよい自分自身や世界をつくっていくべきだと思った。そして、今までたくさんの人に支えられていたこと、日常生活でさまざまな優しさをもらっていることはこれからも覚えておかなければならないことだと思う。



入選



## 一期一会だとしても

静岡県立清水南高等学校 中部部 二年

梅村 実結

私は、夏休みや冬休みなどの長期休みになると、時々バスで祖母の家に行きます。そして勉強したり、本を読んだり、テレビを見たりして過ごします。そんな夏休みのある日、私は祖母の家に行くために、いつも通りバス停に向かいました。この日は、雨が降ったり止んだり不安定な天候が続いていました。家を出るときは雨は降っておらず、すぐ着くしどうせ降らないだろう、と思い傘は持っていきませんでした。しかし、バス停でバスを待っていたとき、雨が降り出してしまったのです。小雨ならどうかなると思っていましたが、だんだんと雨は強くなっていきました。油断して傘を持ってこなかった自分を責めながら、戸惑う私。そんなとき、同じバスを待っていた女性が困っている私に気がついたのか、声をかけてくれたのです。

「よかったら傘、入りますか。」

声をかけられるとは思ってもなかった私は、ど

う返答していいのかわからず、

「あ、いえ、大丈夫です。」

と、おろおろしながら答えてしまいました。あとになって、わざわざ声をかけてくれたのに断ってしまつて、申し訳ない気持ちになりました。せめてお礼くらいは言えば良かったのに……。そう考えているうちに、雨はどんどん激しくなつていきます。そのとき、先ほどの女性が、

「大変大変。びしょ濡れになっちゃう。」

と言いながら、私を傘に入れてくれたのです。しかも、わざわざ私のところまで来てくれたことに申し訳なさを感じながらも、なんだか嬉しくなりました。この「嬉しさ」は、私のことを心配してくれた嬉しさと、こんなに優しい人がいることを実感した嬉しさです。

バスに乗り少しすると、雨はだんだんと弱くなっていきました。バスを降りるとき、私を傘に入れてくれた女性に、勇気を出して言いました。

「さっきはありがとうございました。助かりました。」

「いえ、お氣をつけて。」

会釈をして、私はバスを降りました。

顔も名前も知らない人に自分から声をかけるのは、私にとってとても勇気のいることです。

ではなぜ、勇気を出してまで親切にするのでしょうか。別に親切はしなくてもいいのです。自分から話しかけたくないのなら、そうしなくても何の影響ありません。それでも親切にする理由、それは、自分がその人の立場になつて考えてしまふからだだと思います。バスを待っていたときの私は、このまま雨が降り続いていたら着く頃にはびしょ濡れになつてしまうという焦りの気持ちがありました。女性は、その私の気持ちを汲み取つて声をかけてくれたのだと思います。そう考えると私は、胸いっぱい気持ちになりました。私は、相手が困っているな、と感じたのなら、勇気を出してでも自分のできる親切をするべきだと思っています。

## 「無限の可能性」

静岡市立城内中学校 一年

江藤 愛莉

私は、小さな親切も大きくなる力をもっていると思います。誰かのやくにたきたいという気持ちは無限の力を秘めているのだと私は

思います。

私は、小学五年生のときからある一つの小さなことを続けています。それは、みんなが給食を食べて落とした食べかすを拾ったり、こぼれた牛乳をふいたりするというものです。「ポタ。ポタッポタ」

ある日のことです。私の目の前でA君が牛乳をこぼしてしまいました。そのまま、牛乳をふくのだろうなと思っていましたが、A君は食器を片付け終わったら、自分の席に座ってしまいました。私はとてもショックでした。こぼれた牛乳をふきながら私はA君はなぜ牛乳をふくことができなかったのだらうと思いました。そのようなことが続き、私は六年生になりました。六年生になってもこのようなことは続きませんでした。しかし、ときどき私が食べかすを拾ったり、ふいたりしているところを見ていた人が「ありがとう」と言ってくれることがあり、そのときはとてもうれしい気持ちになります。先生に言っていたときには、本当に続けていてよかったなと思いました。このことがあって私の心にはある一つの感情が生まれました。それはこれを学校以外のところでも

やってみたらこれまで続けてきた小さな親切が、少しでも大きくなるのではないかというものです。私はすぐにこれを実践しました。

ある日、私が登校していると、おそば屋さんのごみ袋に入っていたはずのごみが道をふさぐかのように拡がっていました。私はこれを道のはじに足でよせ次にここを通る人達のがやまにならないようにしました。この日はごみを足でよせることしかできなかったのですがこの日から私は袋を持ち歩くようになりました。するとさっそくこの袋を使うことになりました。下校時、道ばたにアイスクリームの箱が落ちていました。この箱を拾って帰った私は、この日、日記に書くネタがなかったため下校時のことを書きました。その日から四カ月程たったある日。私はあることに気付きました。先生の机のとなりにあるロッカーのような、たなのようなものに、コピー用紙が画用紙の上にセロハンテープではってありました。その紙には、あのととき私が書いた日記がコピーされていたのです。私はこれを見てつい笑ってしまいました。笑っている私を不思議そうに見る友達にこれが私の書いた日記

だということがバレないように、あたかも他のことで笑ったかのように私は話をそらしました。きっと照れかくしのつもりだったのでしょう。なぜならそのとき私は、とつてもうれしかったのですから。これを見ていたA君は、次の日、グリーンピースを拾っていました。誰かのためにやる親切が伝わって大きくなっていくことが分かりました。親切にはやはり無限の可能性があるのだと思います。

### 自分を変えるために

函南町立函南中学校 三年

大村 真由

「ごめんね、ありがとう。」

前の席の子が周りの人たちにお礼を言った。授業中、筆箱を落としたことに気づいてさっと立ち上がり拾ってくれたことに對する感謝だった。だけど、私はその中にはいなかった。「ちょっと貰うよ。」

配達係が何十冊もあるノートを重そうにかかえているところにクラスの女の子が声をかけてい



入選

た。私も大変そうだなと思ってはいたけれど、その子のように声をかけることはできなかった。

私には、こういうことがよくあった。頭の中では考えていて、あとはその通りに声をかけるだけなのに逆に迷惑にならないかなとか、わざわざ声をかけるのとか、考えている間に結局、仕事が終わってしまい行動にうつせないのだ。

私が、黒板係の仕事をしていたときのことだ。もう少しで授業が始まってしまってもかかわらず、黒板はまだ半分も消し終わっていなかったため先生がいつ来るか不安で少し焦っていた。そこへ、クラスの友達は何も言わずに黒板消しを取って反対側から消してくれたのだ。黒板が綺麗になって私がお礼を言うと、全然大丈夫だよ、と言ってその子は席に戻った。私はその些細な行動にとっても心があたたまり、相手の仕事に手を出してどう思われるかなんていう、あのことを考えずにただただ相手のことを思って行動できるその子がとてもかっこよく見えた。それと同時に今までの自分がとても恥ずかしくなり、今までの自分を変えて、あの子みたいに強い自分になりたいという思いが強くなった。

その日から、私は周りをよく見ることを意識して生活した。よく見てみると、生活の中には私ができることで溢れていた。見てみぬふりはない。私は、自分の中でそう決めて、机を直したり、開けっ放しの窓を閉めたりと毎日いいことを続けた。

ある日、前に私を手伝ってくれた女の子が一人で大変そうに給食の準備をしているのが目に入った。私はそれを見て、緊張しながらもすぐに近寄り声をかけて手伝った。準備が終わり、その子が、

「ありがとう、すごく助かったよ。」

と言った。この言葉をきいて、尊敬している子に、どこか認めてもらえたかのようにすごく嬉しかったし、私はこの瞬間に自分を変えることができたんだと思った。

きっと、私と同じように、親切な行動をしようとするときいろいろを考えて、結局できないなんていう人もいると思う。でもそんなことを考えている前に小さなことから始めてみてほしい。少し勇気を出して親切な行動をすることで周りも自分も嬉しくなり、きっと自分を変えることに繋がると思うから。

## 小さな安心から学んだこと

静岡市立長田南中学校 二年

小田 幸采

「やばいー忘れた。」

コロナ禍でマスクは必需品である。レッスンに遅刻しそうだったため、慌てて家を飛び出してしまった。テニスを習っている私は、コートに着いてからもう一度家へ戻ろうかと思った。その様子を見ていた友達が、

「私の予備のマスク、使って！」

と親切に差し出してくれた。良かった！助かった！と心の声。

「本当にありがとう。」

と感謝の気持ちでいっぱいになった。

今年もコロナの影響で、様々な事が制限されている。平和の祭典であるオリンピックは、各国の選手がマスクをして表彰台上がり、マスクをして会見にも臨んだ。そこには、一人一人のコロナに対するエチケットとマナーがあり、感染させてはいけないという小さな親切からなっている。



私が観ていたオリンピック中継の男子バレーで、対戦相手のブラジルの選手が試合中もマスクをつけているのがとても気になった。私もマスクをつけてテニスのレッスンを受けた事があるが、それはとても息苦しい。オリンピックの選手なのだから、比にはならないだろう。その選手はやはり注目され、取材記事を読むと、「自身の息子さんにぜんそくがあり、少しでもリスクを減らすための家族を思っている行動」という事を知った。マスク一枚のこの気持ちに心が熱くなった。

コロナが未だに治まらない中、今秋私が通っている英語の先生は国連の仕事でヨルダンの首都アンマンへ行く。目的は、コロナの情報収集と分析、更にはヨルダンの学校での感染防止設備を増やす手伝い等、コロナ終息に向けて尽力する。一方で、今私たちが出来る事は、一人一人がコロナに対して高い意識を持ち、拡大させないための努力をする事。その陰では大きな規模でコロナ対策に立ち向かっている人がいる事を忘れてはならないと思う。

日本のマスクの歴史は大正時代から始まり、昭和になりインフルエンザが猛威をふるうた

びにマスクが必須アイテムとなった。そして、現在はコロナ。

日本人は昔からマスクにはなじみがあるため、マスク生活は容易に受け入れられた。しかし外国は違う。コロナワクチン接種を終えた人は、マスクを外せる生活に戻りつつあり、やはり、マスクを負担に感じるのだろう。

私たちはマスク一枚で小さな安心を手に入られ、それはエチケットであり、マナーに繋がる。私が友達からもらったマスク一枚には、自分を守り、友達を守る大切で大きな役割があった。コロナを通じ、マスク一枚から学んだことを、今後は私が人を助けるために惜しまず活かしていきたい。

## 言葉の無い時間

浜松市立立進中学校 三年

勝又 麻帆

「言葉がいらない時間」それがあある事でいつも私は救われています。

悩み事というのは生活している中で無くな

る事はないでしょう。一人でその物事が解決できない時、誰かに相談をした事がありますか？私もあります。ですが、私はこの「相談をする」という行為がとても苦手でした。自分の気持ちを誰かに伝えるという事は難しいことです。心の気持ちは自分には分かりませんが、目で見られる物でもありません。だからこそ、それを相手に伝えて何が変わるのか、意味があるのか分かりませんでした。もちろん相談をした事が無い訳ではありません。気にかけて声をかけてくれる人もいました。けれどその人達に相談しても「何かが違う」そんな気持ちに変わりはありませんでした。

ある日、私は親とケンカをしてしまいました。ささいなケンカでしたが気分は落ち込み何もする気になれないでいました。そんな私を見た一人の友達が私の元へ来ました。さて自分だったらどうするか考えてみてください。きつと「大丈夫？何かあったの？」と声をかけてくれるでしょう。私が話を聞く側だったからその言葉をかけると思います。しかし、その友達は違いました。ゆっくり私の隣に来て何も言わず手を握っていてくれました。私は



入選

この言葉が無い時間こそとても大切だと感じました。この時間があつたから心の整理ができ、今何に悩んで、何について意見を求めたいのかが分かりました。そしてその子は私からしゃべり出すのをずっと待っていてくれました。

「無理に話すことなんて無いよ。自分が聞いてほしい、と思った時に聞かせてほしいな」そう友達は言ってくれました。そして相談をした時も「そうだったんだね」と否定から入るのではなく、まずは自分を肯定してくれます。その後で、「こうしてみたら？」とアドバイスをくれました。ケンカをした親を否定する訳でもなく私の気持ちに共感する訳でも無く聞いてくれたおかげで何をすべきかを確認する事ができました。この小さな気遣いがあつた事で私の気持ちはとても明るくなりました。声をかけて話を聞く事は重要な事だと思います。しかし言葉をかけないからこそ伝わる心の言葉も大切だと思います。ちょっとした違いですがその友達の気遣いで大きな変化がありました。今後、人の話を聞く事は増えていくと思います。私もその友達のように相手と心を聴くという事を大切にしていこうと思います。

## 私にできること

静岡市立城内中学校 三年

加藤 未季

二〇二一年七月三日午前十時半ごろ。熱海市伊豆山地区で起きた大規模な土砂災害。今もなお行方不明者が五人います。家を失った方や、大切な家族を失った方などの声が、何度もテレビで放送されました。災害発生から約一か月たった昨日、私は近くの百貨店で募金をしました。

災害発生当時、私はニュースで熱海の現状を知りました。その時、思ったのは「熱海市ってどこら辺にあつたっけ。」ということでした。調べてみると私の住んでいる静岡市からたった九十キロメートルの距離でした。私の地域では大きな被害はなかったため、少し安心してしまいました。それからの毎日はいつもと変わらず、ニュースを横目にだらだらと過ごしていました。今ではそんな自分の行動をとっても残念に思います。

そんなある日、このような記事を見ました。「地元人間がやらんと。」（東京新聞ウェブよ

り）目をひかれて、その記事を読みました。すると、その記事には被災者の方々自らボランティア活動をする姿が記されていました。自宅が土砂で埋まり、家族は県外に避難させた。そんな状況の中で私なら自分を優先して行動してしまうと思いました。熱海市では直接の被害を免れた家も多く、そのまま暮らす人も多くいました。中でもお年寄りが多かったため、地元の若い人の力というのはとても重要だったのだろうと思います。もし、自分が被災したら人を助けるどころか、ちゃんと自分が暮らしているのだろうか。そして今、私はこの熱海の現状を見ているだけなのだろうか。この記事で感動と同時に後ろめたい気持ちも出てきました。モヤモヤとした気持ちを少し持ったまま、関連記事をいろいろ見てみました。ボランティアのような事はやれそうにないけれど、何もしないのは…とモヤモヤは濃くなっていきます。しかし、昨日。母からおつかいを頼まれて百貨店に行くと、「熱海市伊豆山土砂災害」と書かれた募金箱がありました。私はおつりのことを思い出しました。何千円とか何万円とか募金できるわけではないし、たった少しのおつり

で被災者の方々の力になれるのだろうか。私は悩みました。でも、たった少しのおつりでも何人かのお昼ごはんになるかもしれない。たった少しのおつりでも私に人助けができるかもしれない。そう思って、私は初めてはつきりとした意志をもって募金することができました。

私のした小さな親切が誰かの力になれるかはわかりません。それでも、自分の中のモヤモヤした気持ちはなくなった気がします。だからのためにすることは自分のためにもなるのだと実感しました。小さな親切から親切の輪が大きく大きく広がっていくといいな、と思います。

いつでも手を差し伸べられる人間に

浜松市立開成中学校 三年

加藤 優佳

「痛っ！」

一瞬なにが起きたのか全く分からなかった。大丈夫？大丈夫？という声で、自転車から道路に投げ出され転倒してしまったことに気がついた私は、我に返るうちに痛みより怒りの

感情が湧き出てきた。今日は雨だし道も狭いから一列で帰ろう、と約束したのに、友達一人が途中から隣に來たあげく転んだのだ。つまり、私は巻き添えに遭った。

とりあえず立とうとしたが、痛みで思うように動けなかった。先に転倒した友達は、ごめんね、ごめんね、とただただ謝り続けてくる。並列してきたことへの苛立ちはあったが、悪意がなかったことは解っている。いいよ、と言うしかなかった。

そんなやりとりをしていたところ、他の友達も、早くこれで冷やした方がいい、と言って水の袋をくれた。聞けば、私が転倒した後すぐに二百メートルほど離れた所にあるファーストフード店まで走り、事情を話してもらってきてくれたらしい。陸上経験が豊富な彼女は、怪我の応急処置として咄嗟にアイシングが頭に浮かんだようだ。

彼女とは、幼稚園から現在まで同じ学校で更に同じ陸上部。やらないといけないことがあっても、めんどくさい、とか、やらなくてもいいじゃん、と決して誉められるタイプではないのだが、その彼女が自ら私のために

お店まで走ってくれた。しかも、今日は自転車に乗って帰るのは無理かも、と判断したらしく、今日一日自転車置きかせてほしい、とお店の人に頼んでおいてくれたのだ。

部活の自主練へ行った帰りで遅い時間だったにも関わらず、私の母が来るまで、みんな残ってくれた。一つ下の後輩も絆創膏をくれたりタオルを貸してくれたり、ずっと気づかってくれた。後で知ったのだが、私が転倒した時すぐ後ろから車が来ていて、急ブレーキをかけながら避けて行ったらしい。運が良かった。

結局、二週間位の安静で済んだ。すぐに患部を冷やしたのが良かったらしい。

私のために走ってくれる友達がいた。一緒に待ってくれる友達もいた。先に転倒した友達も、その日の夜、翌朝、翌夜…と、ずっと気にかけて続けた。事故当初の怒りは、みんなの優しさに浸かっているうちに、いつの間にか消えていった。

私が逆の立場だったら、同じことができたのだろうか？

助けが必要な人がいたら、頭で考えるよりも先に、体が動くような人に私もなりたいた。



入選

## 「優しさのサイン」

静岡市立蒲原中学校 二年

栗原 微始

「あつ、またあのマークの人だ。」

朝の自主練のために早く乗りこんだ電車は、すぐに空いている席なんかを十秒もかからず埋め尽くし、次の駅に向かう。そこで毎回乗ってくるのは、優しいような垂れ目とその下のホクロがトレンドマークのおじいさんだ。

そのおじいさんのバッグに、いつもついているハートのマークのカード。最初は、よく年配の人がつけているものという程度の認識だった。しかし、偶然目にしたネット記事により、認識が大きく変わったのだ。

どうやら、そのハートのマークのカードはヘルプマークというものらしく、外見だけでは健康面に問題があることがわからない人が援助を得やすくなるように作られたらしかった。思いかえしてみれば、あの優しいようなおじいさんも時々しんどそうに見えた。きっとあのヘルプマークが、私を含めた乗客全員に助

ける優しさをもとめているサインだったのだ。

数日後、また早朝の電車に揺られていると優しいようなおじいさんが、今日もヘルプマークを揺らして乗りこんできた。結局、あのヘルプマークがもつサインを知ってからまだ何も出来ずにいる。あと〇・一%の勇気が私にはどうしても出せなかったのだ。

私は、少しの期待を胸にまわりの様子を伺っていた。しかし、期待とは裏腹にみんながみんなスマホを熱心に見つめていて、椅子を譲る気配なんてさらさらなかった。そもそも、このおじいさんとヘルプマークに関心をもっている人は、果たしてこの中に何人いるのだろうか。迷惑じゃないだろうか、お節介じゃないか…そんな不安をグツと飲み込んで、私は席をたった。きっと今、助ける優しさのサインに応えてあげられるのは私だけだから。

「おじいさん、お席を譲りましょうか。」

勇気をふり絞って出せた一言に、おじいさんは驚いたような顔をしてから、

「ありがとうねえ。座らせていただくよ。」

と微笑んだ。その顔に、不安の気持ちさがスッと抜けていくのが分かる。今日程に、勇気を

出してよかったと思う日は、これから一生ないかもしれない。

あれから、朝練の頻度も減りあのおじいさんを見かけることも少なくなった。けれど、私が時々目にする光景には、そのおじいさんに違う学校の学生が席を譲るシーンが映っている。これは、私の思いやりをきっかけに周りの人への思いやる勇気の輪が広がった証だと思ふ。その輪は、きっかけさえあればきつとどこまで広がっていく。どんどん広がっていく。いつかは地球に住む全人類で繋がった一つの輪になるかもしれない。そんな一つの輪をつくるのに大切な、一つのきっかけ。そういうものをつくっていくけるような大人に私はなりたいと思ふ。

## あたり前の日常とありがとう

沼津市立第三中学校 三年

小番 万由佳

コロナウイルスは私達の日常を簡単に奪い去ってしまいました。それまでのあたりまえだと思っていた生活がたった一つの手でオセ

口の石が全て返されるように変わっていくことに恐怖さえ感じました。

私にとってコロナウィルスで最も大きかった影響は学校の休校でした。私はもともと、一人っ子でさらに、近くに年齢の近い子も住んでいないので、休みの日は家に引き籠り、音楽を聴いたり、漫画を読んだり、一日中ダラダラして過ごしていました。家に居るとやることはほぼ無く暇だったため、学校に居る時間の方が好きでした。又、学校では、空き時間があると、必ず友達と話している程に人と話すことが好きな私にとって休校や友達と全く会えない生活は寂しく、とても窮屈なものでした。

私は誰にも会うことが出来ない寂しさをまぎらわしたくて、インターネットの世界に入り込みました。休校の直前に友達が、

「今、こういう人達にハマっているんだ。」

と教えてくれた、実際に存在するけれど、イラストとして、インターネット上で活動するネットアイドルのような人達。もともと、アニメなどが好きではなく、私はハマるはずが無い、と思っていたその人達の沼にどんどんと、のまれていきました。昔から好きなもの

ができるのとそれをとことん追い求めて、その繋がりで違うものにもハマって行ってしまう私の厄介な性格もあって、私は、歌い手、ボーカロイド、配信者、ゲーム実況者など様々なものにハマっていきました。休校期間が終わり、友達と会うことが出来るようになり、インターネットの世界から少し離れるようになりましたが、休校が続いていたら、きっと私は依存していたと思います。

今、コロナ禍は続いています。普通に登校できるようになりました。私にはいつでもいっしょにいる四人の大切な親友がいます。休校でネットの世界にのめり込んでしまった私に友達と過ごすことの楽しさを、ネットには無い魅力を感じ出させてくれた大好きな人達です。私は以前校長先生が朝礼でおっしゃっていたことを思い出しました。

「あたり前の対義語はありがとうなのだそうです。」これを聞いた時は、あまり意味を理解していませんでしたが、今まであたり前だと思っていた日常がコロナで簡単に崩れてしまったように、あたり前が無くなり、無くなった時にそのありがたみを感じる、今回のコロナで改めて意

味を理解しました。今はいつもいっしょにいてくれる四人の親友達との日常も、あたり前ではなく、ありがたいことなのだ、と心に刻み、この日常が変わらないことを願いながら一日一日を大切にしていきたいと思っています。

## 今、大切なこと

浜松市立雄踏中学校 二年

杉山 舜夢

浜松市の新型コロナウイルスへの感染者は、歯止めがかからず連日過去最多の数字となっている。その間、医療従事者の方達は自分が感染する恐怖に向き合いながらも、休みなく働いている。それでも、病床が足りず自宅療養で亡くなっているのが現実だ。

以前、航空自衛隊のブルーインパルスが、医療従事者を応援する飛行の様子をニュースで見た。医療従事者の方達には、自然と笑みと涙があふれていた。そして、ありがとうの言葉がこぼれていた。

人のために活動したり、協力している人の



入選



行動は親切なのだろう。『親切』とは、思いやりを持って人のために何かをすること。僕は航空自衛隊の人のような大きな親切は出来ない。親切に大きい、小さいがあるのだろうか？

コロナ禍で僕が出来る親切は何か、考えてみた。それは花を植えること。花には、自然と人を笑顔にする力があると思う。僕の家の前には区役所があり、コロナ禍の状況でもしっかり出勤している人の姿を見る。この方達に感謝と応援の気持ちを込めて、元気な色の花を植えた。毎朝、この花を見て明るい気持ちで仕事を頑張ってほしいと思う。とても些細で小さなことだけれど、これが「小さな親切」なんだと思う。

浜松市は、まん延防止措置から緊急事態宣言に変わった。変わったけれど、僕たちにはまだ大きな変化は分らない。でも僕たちが出来ることは、不要不急の外出自粛・マスクの着用・手洗い・三密をより気を引き締めて徹底していかないといけない。それは、移らない・周りの人に移さない思いやりだ。

今、この世界で広めないといけないことはコロナではなく親切だ。一人一人が相手への

思いやりと前向きな気持ちを大切に過ごすことで、コロナ感染者数が減ることを願いたい。そして、みんなの小さな親切の積み重ねが、大きな力に繋がるだろう。

## 外国人への道案内

静岡県立清水南高等学校 中部部 二年  
杉山 寧音

それは、私が小学校五年生の頃のことです。私は学校の帰り道に仲良しの二人と一緒に歩いていいたとき、観光客と見られる外国人の家族に声をかけられました。その家族は、私の地元である三保の松原のパンフレットを私たちに見せながら、ここはどうやって行くのかとたずねているように感じました。しかし、私たちは学校で多くの英語を学んでいたわけはありませんでした。そのため、この家族は何を言っているのか、どう言えば良いのか分かりませんでした。だから、手で表したり絵を描いて表したりと、自分達なりに工夫して様々なことをしました。説明が終わってから、私は

あれで良かったのだろうかと少し悩みました。中学二年生となった今、私はこの出来事について改めて考えてみました。そして、あとき三保の松原まで案内することだって出来たのではないかと思いました。そうすれば、あの家族は安心して行けたかもしれない、何より私がすっきりと良い気持ちでいられたのではないかと考えたからです。

しかし、この考えに対して、知らない人子どもと一緒に行くのは危険、犯罪が起こる可能性があるなどの点から反対する人も多くいることでしょう。では、みなさんが言葉の通じない外国の地で道に迷っているとします。そこに数人の子どもが歩いてやってくることを想像してください。私だったら、誰でもいいから助けを求めたくなります。ところが相手が何の対応もしてくれず、素通りしてしまったら、逃げるように去っていったら、私はそれまでもあった不安が膨らみ大きな悲しみが襲ってくると考えます。そしてもうその国には行きたくないと思う人もいるかもしれません。私はこのような思いをしてほしくありません。たった数人の行動で国全体を嫌いになってほしくもあり

ません。せっかく日本に来てくれたのだから、素晴らしい所だったと笑顔で帰ってほしいです。

みなさんが反対されるであろう安全面は、地域の人たちとの交流を深め、助け合える関係になったり、防犯ブザーをつけたりと、普段からの意識が大切になってくるのではないかと考えます。

このような行動をとることは、勇気がいることだと思います。私も案内すべきだと考えていても、実際やるとなかなか動けなかったり言葉が出てこなかったりするかもしれません。しかし、私はあのとき後悔しました。だから、英語を学んでいる今、次こそは後悔しないように言いたいです。

Shall I guide you? ㄹ

## 「思いやり」と「助け合い」

静岡市立蒲原中学校 二年

杉山 華乃

今日は友達と遊ぶ日。私たちは、車でなくて電車をつかって出かける。人が少なかつたので席にすわれた。次の駅につくにつれて

どんどん人が多くなってきた。ドアの方をずっと見てるとおじいさんがいた。私は困ってそうだなと思いい声をかけて席を空けてしまった。

「座りますか？」

と声をかけて席に戻ろうとしたら他の人が座ってしまっていた。おじいさんは困った顔をして「いいよ。いいよ。他の所探してみるから」

といい行ってしまった。私は、その言葉を聞いた瞬間ごめんなさいという気持ちでいっぱいだった。私が悲しんでいるとちがう席に座っていた女の子がおじいさんに「どうしたの？」と聞いていた。おじいさんは「席がなくて困っているんだよ」

といていた。そしたら、その女の子が「私の席に座って」

といって席をゆずってあげていた。その席にはお母さんもいたので席はとられずにすんだ。女の子のおかげでおじいさんが席に座ることができたので、感謝している。だけど、私より年下の女の子が人の役に立っているのに中学生の私がそういうこともできてないなんてなざけないと思った。

今、決意してもおそいけどこれからは困っ

ている人がいたら声をかけて助けると自分の心の中で決意した。それから何ヶ月かたって友達とまた遊ぶことになった。困っている人がいたら絶対助けるぞと思った。今日も満員席だった。そしたら、おばあさんがのってきた。この前と、似てることがおこったのだ。私は友達に席をとつてもらって勇気を出しておばあさんに話しかけた。私が「どうしたんですか？」と聞くとおばあさんが「席がないんだ」といった。「それなら私の席に座ってください」といった。おばあさんは優しい顔で「ありがとう。」とってくれた。私のモヤモヤした気持ちがなくなつてとてもスッキリした。私は、ひとみしりでなかなかしゃべれなかったけどこの前、会った女の子のおかげで近所の人、困っている人に声をかけられるようになった。年上が年下の事を見本にするのは変かもしれないけどその女の子を見本として色々な人に声をかけてみた。おばあさんの顔を見てみたら笑顔でこつちを見ていた。私の気持は「よかった」「スッキリした」「嬉しい」という気持ちでいっぱいだった。この前、会ったおじいさんには申しわけないことをした。これからは、そういう人を増やさないように困っ



入選

ている人にちゃんと声をかけたいと思います。私がおばあちゃんになったら優しい男の子女の子が声をかけてくれたら嬉しいなって思いました。知らんぷりせずに困っている人がいたらちゃんと声をかけて私の友達もそのまた友達も助け合いができる人になってほしいなって思いました。私の方が友達より助け合いができてないので友達をみならって子どものうちに「助け合い」という言葉を大切にしている人を助けたいです。

## 「あたりまえ」

静岡市立蒲原中学校 三年

杉山 りり香

みなさんは、幼い頃は当たり前にしていたことが、自分が成長していくにつれて、しなくなってしまったことはありませんか。これは、私の登校中での出来事です。

新学期が始まったものの、新しい春の朝に胸躍らせる訳もなく、片道三十分かかる歩きなれた学校までの道のりを、ただひたすらにボーっと歩いている時でした。楽しそうに会

話しながらピョンピョンとスキップまじりで歩いている三人の女の子達が、顔を見上げると、私の前方を歩いていました。四角く余分なしわのない真新しい通学かばんを背負い、膝よりも長い制服のスカート。一目見た瞬間、新一年生だと、すぐに分かりました。三人の女の子達の会話を聞いていると、どうやらしりとりをしているようでした。

「かさ（傘）ーさくら（桜）ーらーらーらけつと（ラケット）！」

笑いの絶えないしりとりで、私もつい心の内で、参加してしまいました。ふと、信号機のない横断歩道に差し掛かった時、三人の女の子達はあたりまえのように右手を指先までぴんっと挙げて、一時停止してくれたドライバーに向かって笑顔で会釈していました。三人の女の子達から会釈をうけたドライバーも、笑顔で会釈を返していました。その姿を見た私ははっと気付かされました。小学生の時は私もあたりまえのように「手を挙げて道路を横断する」「ドライバーに会釈をする」ということができていたにも関わらず、今では、しなくなっていたからです。それはきっと自分の中で、手

を挙げて横断するのは、背の低い子供が、ドライバーから認識されやすくなるため。つまり、幼い子がすることだし、中学生にもなって手を挙げるなんて、はずかしい。と思ってしまうていたからです。しかし、ドライバーから認識され、安全に横断歩道を渡るという理由だけでなく、三人の女の子達や、ドライバーの表情を見ると、手を挙げて横断歩道を渡り、会釈する。という行いから、笑顔があふれて、歩行者と、ドライバーとの間から、小さな優しさが生まれているように感じました。小さな優しさも、積み重ねることによって、大きな優しさへと変わります。

当たり前にしていたことが、当たり前になくなってしまった瞬間、当たり前に作り出せていたことが、当たり前になり出せなくなってしまう、時間が経つにつれて、作り出す方法さえも忘れてしまうかもしれません。しかし、三人の女の子達が、その「あたりまえ」を思い出させてくれました。ボーっと歩いていた三十分間が私にとって、とても価値のある三十分間へと変わりました。

今日も私は、三人の女の子達の背中を見つ

めながら、共に、信号機のない横断歩道から、小さな桜色の優しさを、あたりまえのように、満開に咲かせて、作り出します。

## コロナ禍で僕ができること

静岡市立城内中学校 一年

鈴木 斗偉

僕のお母さんは医療従事者だ。昨年の終わり頃、お母さんの働いている病院で新型コロナウイルスのクラスターが発生した。僕たちは、お母さんの陰性が確認できるまで学校や幼稚園を休んだ。友達に感染させてしまう心配があったからだ。お母さんは、

「病院でクラスターが発生しました。今から全職員のPCR検査をします。ご迷惑をおかけしてすみません。」

と、ニュースになる前に、僕たちの学校や幼稚園に連絡をしていた。僕は、二日後にはお母さんの陰性が確認でき、すぐに学校に行くことができた。しかし、悪いことをしているわけではないけれど、何となく周りの目が気

になってしまった。

それから、テレビで毎日病院が映し出され、「今日は新たに何人の感染が確認され、合わせて何人になりました。」

という報道が流された。そのニュースを聞くたびに、僕たちはため息をついて悲しくなった。お母さんは、僕たちが友達から何か言われていないかと心配していた。僕は、友達がいっぱい僕の状況を知っていたと思うけれど、何も聞かずに今まで通り仲良くしてくれたのが、すごく嬉しかった。

お母さんの病院では、誹謗中傷を受けた人がたくさんいた、と聞いて僕は心が痛んだ。なんで頑張っている現場の人たちがこんな目に合うのか、と怒りと悲しみが湧いてきた。でも、手紙やメッセージを書く人、消毒やマスクを送る人、飲み物やお弁当を差し入れる人もいて、感謝や応援もたくさんもらった、と聞いて僕は世の中には悪い人ばかりではないと思った。

お母さんは、口癖のように、

「入院中の患者さんがコロナに感染したら重症化してしまう。あんたたちも行動には気を付けてね。」

と、言っている。お母さんの消毒でポロポロになった手を見ると、僕ができることは小さい。マスクをつけること、手の消毒をすること、大声で話さないこと、家族以外と飲食をしないこと、必要以外の外出は避けることは、自分を守るだけではなく僕の大切な人を守る行動になる。みんなは何回もの緊急事態宣言に我慢のストレスがたまっている。夏休みになりオリンピックが開催され、人が動けば感染リスクは高まる。この前、テレビでどこかの病院の先生が言っていた言葉が心に残っている。変異株感染の重症患者が増えてベッド使用率が七割を超え深刻な状況であること、医療従事者は夏休みやオリンピックという楽しい気分にはなれない、という言葉だ。僕は夏休みが大好きだけれど、僕にできる小さな親切は、大切な家族や友達を感染から守るために、もう少しの我慢だと感じている。重症化して亡くなる人を少しでも減らしたい。



入選

## 当たり前という幸せ

静岡県立浜松西高等学校 中部部 三年

高柳 杏胡

淡々と一日一日が過ぎていく中で私達はコロナウイルスと戦っている。いつからだろうか。人が自分の表情を気にせず、人との対面までも避ける事が当たり前の日常になってしまった。いったいいつまでこのような生活が続くだろう。「今日の東京都の新型コロナウイルス感染者数は、」というニュースはもう見飽きた。マスク生活も密を避ける生活も大変なのは私だけではないはずだ。

コロナウイルスの影響で辛い思いをしている人が多くいる。働いている人は仕事が上手くまわらなくなってしまう。また、人同士のトラブルは絶えないようだ。そういった内容のニュースが報道されていると胸が痛む。実際に、私自身も悲しい出来事が増えた。学校で行われる合唱コンクールや文化祭、体育大会、部活動の大会と様々なイベントが中止になったり、形を変えての開催となったたりした。

私達人間は、見えないものに苦しめられている。ゴールがあるわけでもない、このコロナウイルスに脅かされる日々の中で、人は「幸せ」を感じる事ができるのだろうか。

コロナウイルスが流行して一年間の時間を経たころから、人々は己の最大限の知恵と知識を絞って様々なイベントをなんとか成し遂げていた。私もそんな状況を体験した。体育大会や文化祭等は少人数でできるようにしたり、密にならないような種目にされていた。このようにイベント等を全て無しにするのではなく、できる限りの範囲内で楽しめるよう工夫することはすごく大切なのだと学んだ。そのような提案をしてくれた高校生や生徒会本部、実行委員会の方々に対して、感謝と感心をおぼえた。イベントを開催している時、みんなは笑顔で溢れていた。その表情はマスク越しでも伝わった。私はそんな様子を見て、辛い状況の中でも「幸せ」というものが消えてしまうわけではなく、人の力によって生み出すことができるのだと実感した。

コロナウイルスにはたくさん迷惑を被っているが、その反面学べたこともある。一つは、辛く困難な状況に陥った際、どんな行動をと

るのが良いのかだ。ずっと深刻に悩んでいるのではなく、その状況の中で楽しもうとする事。そしてもう一つは楽しめるために工夫し、周囲の人達と協力する事。この先もコロナウイルスとの戦いは続くだろう。それでも楽しく過ごせるためには、みんなが「大切なこと」を意識して過ごせば良いと思う。何の変化もなく当たり前のように過ぎていく日々が一番幸せだと感じた。それを取り戻すために、私は希望を持って目の前のことを一生懸命に励むことを忘れずにいたい。そしていつかは心置きなく人と接し、マスクを外して躊躇なく笑い合える世の中に戻ってほしい。

## できなかった親切

静岡市立長田西中学校 一年

殿待 勇太

ぼくは、小さな親切をいつでもできるように心がけています。しかし、大事な時に親切にすることができなかったがありました。

今年の夏休みが始まったばかりのころ、ぼく



は習い事に行くために信号を待っていました。その時、何かがぶつかる音がしたのです。何が起こったのかと横を見ると若い外国の男の人が乗った自転車と、おじさんが乗った車がぶつかって止まっているのが見えました。しかし、その車はぶつかった人に声をかけることもなく行ってしまったのです。外国の男の人はどうすればいいのかわからないように困った顔をしながら自転車を安全な所へ運んで行きました。ぼくは、

けがをしていないか心配で自転車を運ぶのを手伝おうか迷っていたのです。ぼくが迷っている間にその人は自転車を運び終わっていました。ぼくはまだ心配だったので「大丈夫ですか？」と聞こうと思いましたが、この人は日本語は分からないと思うし、歩いていたら大丈夫だろうと思いいその場からはなれてしまいました。

外国の男の人は普通に歩いていただけ、もしかしたら足が痛いのがまんしていたのかもしれない。ぶつかった後、相談できるような友人もいない日本で心細くて親切な日本人に声をかけてもらいたかったのかもしれない。ぼくは考えれば考えるほど後悔しました。自分ももし外国の男の人の立場なら近くにいる人に声を

かけてもらいたかった、何も分からない外国で助けてもらいたかった、だけどぼくはそれができなかつたのです。

気づいていながら目の前で困っている人に手を差しのべるのができないのは小さな親切をいつでもできるように心がけているとはいえません。自分の都合で親切をしたりしなかつたりすればいいというわけではないのです。自分にとってささいなことでも受け取る人によっては相手は喜ぶし、感謝してくれます。しかも日ごろから小さいことに気づき困っている人を見かけたら助けたり声をかけていると本当に大事な時にどう対処すればいいのかわかると思います。

ぼくは少しの声かけや気づきからできる小さな親切を続けていけば大事な時に困っている人に親切にすることができると思います。

例えばぼくが続けているサッカーならしっかりと練習をするから試合で勇気がでて良いプレーができるのです。ぼくが本当に困っている人に親切にできなかったのは声かけや気づきができているからだと思います。ぼくができていると思っていた小さな親切はまだまだできていません。だから、ぼくは小さな親切という

周りの人へのさりげない声かけや気づきが続けて、どんな時でも、またどんな人に対しても思いやりが持てる人間になりたいと思います。

### コロナ禍の中で学んだ助け合うこと

静岡市立豊田中学校 三年

仲村 起龍

コロナという感染症が流行したしたのは、僕が中学一年の最後のころでした。はじめの頃は、テレビでコロナ感染のことがよく流れていました。しかし、緊急事態宣言が出て、いきなり学校が長い期間休みになったことは信じられませんでした。早く春休みに入ったのは少しうれしかったです。早く春休みに入ったのもできず、友達や先生たちと会えなかったのどつらかったです。まだコロナという感染症の怖さが分からなかったため、友達と遊びたい気持ちもありました。だけど、僕の母は高齢者施設で看護師として働いていて、いつも、「母さんがコロナに感染して職場にコロナを持ち込んでしまったら、たくさんのおじいちゃん



入選

ん、おばあちゃんの命を危険にさらしてしま  
う事になる。おじいちゃん、おばあちゃんは  
コロナとたたかう体力が若い人みたいにな  
いから本当に大変になるの。」

と言っていたので、怖さは何となく分かりまし  
た。また、志村動物園で有名な志村けんさんが  
コロナで亡くなったこともびっくりしました。

でも、コロナの緊急事態宣言中でも毎日仕  
事に行く母を見て、こんな時ぐらい休めたら  
いいのと思いました。そんな僕に、母は、

「施設に入っているおじいちゃん、おばあちゃ  
んたちは、楽しみだった家族との面会ができ  
なくなつて、本当にかわいそうなのよ。」

「大きな総合病院で働いている看護師さんたち  
はもっと怖くて大変な気持ちで仕事をして、  
子供がいてもおうちに帰れないんだよ。」

と、コロナ感染の怖さの中で大変な思いをし  
ている人達がいることを、時々僕に教えてく  
れました。それを聞いて、僕も母が忙しいの  
は仕方がないと思いました。父も仕事だった  
ので、毎日昼間は姉と二人でいました。気が  
付くと、姉は、せんとくやご飯の支度、そう  
じと家の仕事を、母の代わりに自分からする

ようになりました。姉は、

「仕事をしているお母さんを助けたいだけ。それに、  
お母さんが喜んでくれると私もうれしいから。」

と言っていました。仕事から帰ってきた母は、  
「すごい、本当にうれしい。ありがとう。明日  
も仕事を頑張れる。」

と毎日ともうれしそうでした。それを見て、  
僕も何かお手伝いをして母を助けたいなど考  
えて、お風呂の準備と洗たく物をたたむ担当  
をすることにしました。母は父に、

「仕事から帰ってきたら、二人が力を合わせてうち  
の仕事を終わらせてくれるから本当にうれしい。」  
と僕たちの前で報告していました。少し恥ず  
かしかったです。

コロナの流行で僕の周りも変わったことが  
たくさんあったけど、コロナがあったから、  
姉のやさしさと自分から動くことの大切さを  
学び、家族で助け合う事のうれしさを感じる  
ことが出来ました。

## みんなに届け「やさしさ」

静岡市立長田南中学校 二年

西井 陽萌

これは最近の話。私と母で一緒に毎週近く  
のスーパーに行く。そしていつものように、  
スーパーに行つてレジが終わり、帰ろうとし  
ていたら、私の前に赤ちゃんをおんぶしなが  
ら、片手に荷物を持つてカートをひいている  
大変そうなお母さんがいた。この日は、たま  
たま人が多い日で、そのお母さんも私も中々  
前に進めなく困っていた。私は、はじめはそ  
のお母さんのことを気にすることもなく、  
「はやくしてほしいな。」

とだけ思っていた。けれど、カートをひきに  
くそうで困っているお母さんを見て、私は勇  
気をもって、

「そのカート、私が戻しておきますね。」  
と声をかけた。そしたらそのお母さんが、  
「え、ああ。ありがとう。助かります。」

嬉しそうに笑顔で言ってくれた。その瞬間、  
私の心の中から、「ブクッ」と何か温かいもの

が、こみ上げてきた。その時は、これがなんなのかよく分からなかった。

母は、もうすでに家に帰っていたから、さっきの出来事を話してみた。そして、自分でもよく分からなかった、心の中からこみ上げてきたことについても聞いてみることにした。母はまず、良いことをしたとほめてくれた。気づいて判断ができることは良いことだと言ってくれた。母は、

「人に親切にした時にうかび上がってくるのは、あなた自身のやさしさであり、「あ、今良いことしたな。」っていう実感でもあるよ。」

確かにそうだなって思った。あの時、確かに今、良いことしたって思ったし、そのことと、自分の中にある感情のやさしさがでてきて、そしてその、やさしさは、心を通して行動につながるもののことだなと思った。

これは、たった小さな親切だったが、それは良い行動として自分の記憶に残る大切なこと。親切というのは、簡単なことではない、誰もが、すぐにできることではないからこそ自分の中にあるやさしさを大きくして、生きていくことが大切。みんなで寄りそい助け合いながら、

小さな親切から大きな親切へと、自分たちでつくっていくことが大切だと私は思う。やさしさは、限界なんてない一生必要だからこそ、生きているうちに、自分の中のやさしさをみんなに知ってほしい、そしてそのみんなにもやさしさは大切な存在だと知ってほしい。だから、親切にすることは、私、みんなのプラスだ。

## 親切への第一歩

静岡市立豊田中学校 二年

牧田 陽日

「……あれ、どうしよう。家のカギがない。」

僕は、友達とショッピングモールで遊んでいた。その日は、家族がいなかったもので、家のカギを持って遊びに出掛けた。夕方まで遊び終え、帰ってからすることを考えながら、自転車を走らせた。家に着き、リュックを降ろして揺らしてみる。いつもならチリチリと鳴るはずがいくら揺らしても音はしない。もしかして……。リュックの中身を全部出してもカギは見つからなかった。何度確かめても駄目だった。落ち着け、

落ち着けと何度も自分に言い聞かせた。もしこのまま見つからなかったら、もし盗まれていたら、と考えていると、僕は今にも泣き出しそうだった。震える足で警察署に向かった。カギを落としてしまったことを伝えると、落とし物がなかったか、確認しにいってくれた。ありますようにと僕は両手を固く握りしめて待っていた。何分か経ったそのとき、警察官が小さな袋を持って歩いてきた。

「ありましたよ。このカギですか？」

とにこにこしながら聞いてきた。僕は思わず大きな声で、

「はい！」

と答えていた。よかった。心からそう思った。同時に、拾ってくれた人にお礼を言いたかった。拾ってくれた人は、小学六年生の女の子だったという。名前は教えてもらえなかった。六年生の女の子はどんな気持ちで拾ってくれたのだろう。きっとカギを落として困っている人のことを想像してくれたのだと思う。

僕は今まで、何かが落ちていても全く見向きもしなかった。それに関わるとなにかと面倒になると思っていたからだ。落とした人の



気持ちなんて少しも考えたことがなかった。でも、今回カギを落としてみて、落とし物を届けるという小さなことでも、落とし主にとっては、言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいになるということだ。

よし！これからまず、僕も周りをよく観察してみよう！

そして、ん？と思ったら少し勇気があるけど声をかけてみよう！

それから、相手が喜ぶ姿を想像しながら行動していこう！

カギを落としたことは、痛い経験だったけれど、自分の足りないところに気づかせてもらえて良かった。相手の身になって考える。簡単なことではないけど、これは親切を行うための第一歩だと思う。

## 「変える力」

静岡県立浜松西高等学校 中部部 二年

宮本 諒太郎

コロナウイルスによって、僕たちの生活は

一変した。マスクをつけて登校し、屋内に入れば手洗い・うがい・そして消毒。距離を空けて会話し、友達と満足に外出もできない。コロナウイルスが広まりだしておよそ一年半、こんな不自由な生活、いわゆる「新しい生活様式」が当たり前になりつつある。

しかし、「新しい生活様式」は、悪い影響だけを及ぼしたわけではない。ひたすらに好きなことをしたり、新しいことにチャレンジしてみたり…。外出自粛によって増えた「おうち時間」は、僕に新しい発見を与えてくれた。

僕は、もともとあまり外出するタイプではない。だから、外出自粛要請が出されてもあまり自分に影響は無い、学校が休校している間もやることはたくさんあるだろう、そんな風に考えていた。しかし、どこにも行けない外出自粛の中の生活は、なかなか退屈だった。僕は大量の「おうち時間」を手にしてしまったのだ。

そこで僕が始めたのが、「作曲」だ。小さい頃から習っている音楽の知識を活かして曲を作ることにした。自分の手から音楽が創られている感触が本当に楽しくて、止まらなくなっ

た。ずっとずっとにらめっこしている僕に、最初はたびたびストップをかけていた家族も、次第に曲作りに協力してくれるようになった。他にも、僕は色々なことにチャレンジをした。ピアノで難しい曲を弾けるように練習してみたり、苦手教科の克服に挑戦したり…。チャレンジをするたびに新しい世界が見えるようになった。そして、そのたび家族はアドバイスをくれ、僕のチャレンジがより一層中身の濃いものになるよう応援してくれた。そんな時間の積み重ねが、家族の絆を固いものにしてくれたことは、間違いない。

また、県外に住む祖父母との絆も深まった。会いに行けない分、定期的に電話をかけて、お互いの近況報告をしている。数学の教師をしていた祖父は、テストが近くなると、僕専用の問題集をつくり、送ってくれる。そこには、手芸が得意な祖母の、手作りしたマスクが添えられている。好みもサイズもぴったりだ。そのマスクが、いつもたくさんの勇氣と、安心を与えてくれる。

今この時も、コロナウイルスは世界中で猛威を振るい、人々を不安の渦へと巻き込んで

いる。大変な時代だ。でも、「大変」なのは、「大きく変わること」で、行い次第で、良い方に変えることもできるのではないだろうか。

これからも、大変な出来事は、思いがけず起こるだろう。どんな時も、周りの人と手を取り合いながら、「良い方へ」変われるような力を身に付けていきたい。

## 二つの思いやり

静岡市立蒲原中学校 三年

望月 唯菜

これは私が下校している時にあった出来事です。その日は帰っている途中にたくさん的小学生とすれ違いました。小学生の明るい声が私の耳まで届いて、「楽しそうだな。」と思いつつ、「大丈夫？」という声が私の耳に届きました。「なんだらう。」と気になってふり返ると、ある女の子が転んでしまっていて立っていない状態でした。私は「行かないか」と思いつつ、勇気が出せず、結局助けに行くことができま

せんでした。

そんな時に車に乗っていたある男性が女の子を心配して、「大丈夫？」と優しく声をかけ、そして手を差し伸べていました。普通は気になっても、女の子を助けに行くことはできないと思います。私はあの男性のようにすぐ助けに行ける人になりたいと思いました。

男性が助けた後、女の子は「ありがとうございます。」と笑顔で言っていて、男性が親切ということだけでなく、女の子も思いやりがあり、気持ち良くなりました。

それから男性が帰った後、女の子は嬉しそうにしていますが、やっぱり痛そうでした。私はもう一度「行かないか」と思い、今度は勇気を出して行きました。私は、絆創膏をあげました。ただそれだけのことですが、私にとってはとても勇気のいることでした。その女の子は「ありがとうございます。」と笑顔で言ってくれました。私はその時の笑顔を今でも覚えています。感謝されたことが嬉しかったから覚えていると思いました。私は勇気を出して言ったことは、間違えていなかったんだと考えました。

私はその日をきっかけに身の周りのことをもっと見るようになりました。誰かのものが落ちていたら拾う、ゴミを拾う、窓を開けるなどを行うことも大切だと思いました。私はそれらのことを意識して行うのではなく、自然と行うことができるようになりました。

改めて考えると、私はあの時に勇気を出して良かったなと思いました。感謝されることはこんなにも嬉しいことで、自分に自信をつけてくれるのかもしれません。小さなことも一度、勇気を出せば、だんだんと自信がついていくと思いました。

私は、この出来事を通して今までの自分について振り返ることができました。今までの私は困っている人がいたら、「大丈夫かな。」と思っても、行動に移すことができませんでした。しかし、この出来事のことからは、よく周りを見て行動したり、自分には何ができるのか考えたりしました。私は、人に笑顔を与えることができる人になりたいと思いました。





## 観て学んだ親切

島田市立島田第一中学校 一年

山内 一輝

ぼくはこの夏、東京オリンピック観戦に夢中になった。テレビの画面からではあるが、言葉で言い表せないほど熱狂し、たくさんの感動を受けた。様々な競技の選手が、今までの血のにじむような練習や努力の結果からメダルを獲得したことにはもちろん感動したが、ぼくは試合後のインタビューでのコメントに衝撃を受けた。

勝った選手、負けた選手に関係なく、コロナ禍の困難な状況の中でオリンピックが開催できたことへの感謝や、応援してくれた人や開催に協力してくれたスタッフ、家族等への感謝を伝えていた。そして、オリンピックに参加した多くの海外選手やコーチ達からは、「日本の大会関係者の親切さや働きはメダルに値する」と称賛された。

例えば、アメリカ代表のウエイトリフティングのコーチは、「日本人のおもてなしの心」

に驚き、感謝や感動を伝えていた。それは、夜中にも関わらず、選手村に戻ってきたバスを、マスクをした大勢の日本人スタッフが、オリンピックの旗や、英語で「応援しています」と書かれた手作りのメッセージボードを掲げ、手を振りながら出迎える姿に日本人の温かさを感じたということだった。遠い海外から来る日本に来てくれたのに、観光もできず宿舎にいてだけの選手達に、少しでもおもてなししたいという気持ちは、ぼくにも良くなる。

今回の東京オリンピックの開催には、賛否両論あった事を、ぼくも連日のニュースで知っていた。ぼくはスポーツが大好きなので、オリンピックをとっても楽しみにしていた反面、「本当に開催されるのかな…」と正直不安に思っていた。一年の延期や新型コロナ対策など、異常事態の大会だったからだ。でも、終了後は、世界の国々から「親切な思いやりの日本に感動した」「日本人は、大会の運営に協力的で、とてもいい大会だった」等と高い評価を受けた。それは、大会に関係した日本人一人一人の小さな親切が、世界中に感動を与

えて、今までにない困難な中でのオリンピックを成功に導いたのだと感じた。ぼくは、同じ日本人としてとても誇らしく思った。そして、それに対して感謝や感動を言葉で伝える世界中のアスリートもまた素晴らしいと思った。これが世界平和につながるのではないだろうか。

ぼくは小さい頃からサッカーが大好きで、中学生になった今も毎日のように練習や試合に参加している。けれど、それは自分一人で成り立つものではない。忙しい中で熱心に指導してくれるコーチ、共に戦うチームメイト、遠方まで送迎してくれる両親がいて初めて継続できるものだ。今年の東京オリンピックを観て、改めてそういう温かいサポートが選手にとってどんなにありがたいか実感した。だから、ぼくもどんなに困難な状況でも日々周りの人達への思いやりや感謝を忘れずに生活していきたいと強く思う。